

昭和
和和
四二
十六
年
九七
月二
十三
日
第三
行(種
種郵
便物
認可
行)
每
月一
回
十五
日發
行

(通第二六八号)

慈

光

第二十三卷

第九号

次

目

懺悔録	(一)	近角常観	(1)
盆踊りの感想	……	福島政雄	(8)
呼び声	……	北条恵実	(11)
念仏詩抄	(四)	木村無相	(15)
歎異抄とく	……	花田正夫	(18)
ともしび	……	聚墨生	(23)

懺悔録

(一)

近角常観

序如来は一切の為に、常に慈父母と作(な)り玉えり当(ま)さに知るべし諸の衆生は、皆是れ如来の子なり世尊の大慈悲、衆の為に苦行を修し玉うこと人の鬼魅(きみ)に著せられて狂乱所為多きが如し、これ阿闍世王大煩悶におちいり、仏陀の大慈悲に接したりし時、仏徳を讃歎したる涅槃經の偈頌(げじゆ)の句であります。

回顧すれば、私が苦悶した時、父が心配して「自分は老年であるゆえ、代れるものなら代りて遣りたい」と云われたる言は、あたかもピンバシヤラ玉が空中より阿闍世王に告げ導かれたる言の如く思われます。また私が病熱に悶え苦しんでいた時、母が心配して少しも眠らず、日夜看病して下さつたことは、イダイケ夫人が冷薬をもつて、阿闍世王の瘡に塗られたと全く同様に感じます。「我身を生育したもう大悲の母は、西方教主弥陀尊なり」と云える古聖の言は、今さらの如く身に浸みます。たしかに父母はこの世に現れ給いたる仏陀の慈悲であり

ます。仏の慈悲に接したる多くの人々において、常に父母の導きと親しき関係のあることを發見いたします。実に親は子のために自己を捨て、道理を捨て、或は慰め、或は戒め、種々苦勞して下さるが如く、仏陀は私のために永劫の昔より、一念一刹那も慈悲の眼を放ちたまわず、人が心配して気が狂うほどに苦勞して下さつたお蔭で、ようやく仏陀のお慈悲が分つたのであります。

「弥陀の五劫思惟の御苦勞をよくよく案すれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」とは、実に仏陀の大親に気がついた心中をよく言いあらわして下さつた。今から思えば、苦悶や病氣は勿論、生れながら今日にいたるまで、一として仏陀の深きお導きならぬはなかつたのであります。世の苦悶懊惱したまえる人々人間の浅薄なる思慮をすてて、仏智不思議の広大なるを仰ぎたまえ。世の中のこと一として、仏のお慈悲のたわものならぬはありませぬ。

私は久しき間、自分が煩悶したことを言うのを避けて居りましたが、近頃同様に苦しめる人々が多い様でありますから、有體に懺悔して共にお慈悲を頂いてもらいたいのであります。そして私の心中は、全く阿闍世王の煩悶と符節を合せたるが如く感じましたから、これもあわせて叙した次第であります。

この書は、昨年夏、信州飯山附近において開かれたる修養会において『歎異抄』を講じた時の解題であります。それを信友佐崎幸喜君が筆記して下さつたのであります。故に巻末に『歎異抄』を附加して置きました。是非これを熟読、拝誦して、千古尽きざる慈悲の靈泉を味おうて下さることを希望いたします。

明治三十八年五月八日 求道学舎に於て

近角常観識

第十四版 序

本書は私が入信の実験を披瀝(ひれき)して、阿闍世王の煩悶得信に比較し、歎異抄第二章の聖人告白の聖訓を鑽仰したつもりでありました。しかるに『教行信証』にこの阿闍世王慚愧の涅槃經の文を引用せられたる所は、むしろ信後の悲歎として、その劈頭(へきとう)に

「誠に知りぬ、悲しい哉愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、

名利の大山に迷惑して、定聚(じようじゆう)の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快(たのし)まず、恥ずべし、傷むべし、矣」といふ聖人の御述懐があります。これあたかも歎異抄の第九章の聖訓と符合するものであります。回顧し来れば、私の懺悔も、入信の告白と同時に、また信後この講話を為(な)したる時、自身の告白たりしことを想到するものであります。

しからば則ち、この書は、私の一生涯を通ずる懺悔録と謂(いつ)つべきであります。本書は大震災の時、劫火の厄に遇い絶版になりたるため、今回全然版を新にせらるるに際し、一言所感を叙し、併せて本書を執筆せられた佐崎幸喜君が一昨年八月二十八日、示寂せられたることを哀悼する次第であります。

昭和元年十二月二十五日。

常観識

第一章 緒言

歎異抄は、親鸞聖人の信仰のお話を、まのあたり聞いた人が、自分の耳の底にとどまりてあるひびきを、そのまま筆にあらわして、後の道を求めるものために、遺して置いて下されたもので、実に聖人の信仰を味わうについで、大切の書物であります。その味わうというは、講釈や

理屈では一向価値がないことである。

およそ説教を聞くにも、また聖教を読むにも、唯言葉を開き理屈をならべていると、何を聞いても、何を読んでも唯そのことを聞き流してしまつて、我精神には少しも役に立たぬ。必ずこれを内心に省み、自分の身の上に照らして味つて行かねばならぬ。そもそも宗教は実験である。釈尊をはじめとして各宗の祖師達、自分自身の内心の経験より、この人生の意義、即ち日暮しの上に就いての真の味わいを証し得て、その実験のありのままを説き教えられたものであるから、残し置かれたところの経論聖教を拝読するにも、一一自分の身の上に引き当てて、深く味わうべきは勿論である。決して道理や議論で終つてはならぬ。

こしかるに年月を経るに従つて、段々と形式に流れて、大いに生氣を失うようになる。あだかも清らかな水の、滾々（こん／＼）と流れている川の上を落葉がおおい隠したり、泥土や砂礫が川の底にたまつて、遂にその流を止めるようなもので、何れの宗派も、後代に至れば清らかな信仰の泉が涸渇してただ形ばかりになつてしまふ。その時再び偉人が出て来て自分が人生問題に触れて種々に経験し、最後に仏陀の光明に遇つて、初めて解決がつき、生き生きと胸中に感じ来たつて、信仰の泉が湧き出したのが、新しき宗派の源である。一宗の祖師というは、即ちこの泉を見出

思うにまかせぬにつけ、また我が身の罪のいかにも深重なるに驚き悲しんで、人生において何一つたよるべき点なきに至れるとき、大慈大悲のみ仏の心は、あだかもこの如き吾人を撰取して捨て給わぬという一事である。聖人のこの御教化を聞いては、何人も心底に感銘せずには居られぬ。この一点をおさえてまします方は親鸞聖人である。仏滅後三千年來、比類なき唯一人のお方であると、私は断言するにはばからぬのであります。

此の如き聖人の実験を、心やすく書きあらわしたのがこの歎異抄であるから、此抄を講ずるといふても、これを高尚の道理の上から論ずるのではない。唯聖人の信仰の結晶としてこれを味わうのである。あだかも砂糖のかたまりを嘗（な）めて味わうように、私自身がこれを味わうしてゐるうて喜ぶのであります。而して諸君がこれを聞いて同情同感して下さるならば、それがすなわち諸君の心に仏陀の慈悲の味があじわわれたのである。

かく信仰は、仏の心が直接に諸君や我々の心に触れて下さつた事実である故に、議論や理屈の問接なる手段では、とても味わうことは出来ぬ。直ちに仏陀と接する直接の実験によつてのみ味われるものである。この歎異抄の如きはこの見地に立つて拝読しなければ、おそらく一言一句も了解することが出来ぬのであろう。しかし若し一たびこの

した人である。一つの宗旨が出来たからとて、別のものが出来たのではない。久しき以前よりの仏陀慈愛の清泉を、新たに心の中に味わうた結果であります。

親鸞聖人は、釈迦仏以後、多くの宗旨の祖師達の中でも特に要領を得て、しかも誰にでも味わられるまことに人生に適切な、微妙な信仰を有しておられた。およそ高尚な人には高尚な経験があり、学者には学者だけの経験がある。人々各々それぞれの経験があるが、すべての人の誰にでも通じてよく解るのが、親鸞聖人の経験である。

私は京都の本願寺に参詣して、満堂の群集の中にまじつて、聖人の御真影を拝する毎に、厨子（ずし）の御扉が開くや否や、高いも卑いも、富めるも貧しきも、老若男女、皆一斉に感涙にむせんで礼拝するのを見て、聖人の人格に甚深の味のあることを感ぜずには居られない。聖人の御教化が、たしかに人間の心の急所要点を握つて居るのでなくでは、どうしても、ああいうわけに行くものでない。彼の琴の絃の一枚を弾ずると、他の絃が皆一斉にひびきわたると同様に、学問智識の有無にかかわらず、男女貴賤の区別なく、いやしくも人間ならば、この人生の最大要点たるある一点を叩かれると、万人が万人みな一斉に、胸の中に微妙にひびきわたる信仰である。

その最大要点というは、他ではない。この人生の物事が

実験にふれた以上は、あだかも琴の絃が共鳴するようなあんばいに、一言一句みなハイハイとうなづきて拝読することが出来る。故に私はこの聖教の文句をおうて拝読する前に、この抄に現れたる信仰の実験における極要点と思つて眼目を取り出して、各頂について実験の見地より出来得るかぎり申し述べて、親鸞聖人の信仰の何物たるやを味わい、そして心中に湧き出でたる歎詠の言葉をつらねて讃仰したいと思ひます。

第二章 罪惡と救濟

いにしえよりこの歎異抄は、親鸞聖人の信仰の極處を説破したるものとして、名高き聖教なることは誰も知るところなるが、特に近來新しき青年求道者の手に渡りて、一種清新なる光輝を發揮しつつある聖教である。

全体この聖教は、その文字がすこぶる直截簡明にして、人の肺腑をうがうが如き力があるが如く、またその内容がすこぶる極端に信仰の力をあらわして居る。その云いようの如何にも思いきつて云い放つたる点は、はじめてこの聖教を拝読したる人は、何人も一驚を喫することであらう。しかしして最も何人も眼に着くは、悪人救済と云うことを、如何にも大胆に断言し去つた点である。

けだしこれは、歎異抄の特徴の第一に数えねばならぬ点

であろう。蓮如上人がことさらに奥書して「無宿善の機に
おいては左右なくこれを許すべからざるものなり」と云わ
れたも、この点のことと思われます。昔より子供に剃刀
(かみそり)を持たすようなものであると、云い伝える聖
教である。さりながら、かくの如く危険の断崖にせまつて
あるだけ、それだけこの聖教は、生きるか死ぬかのセツパ
つまつた時の救済である。平素ボンヤリして居るものの眼
にこそ、頗る危険であれ、最後まで切りつめたる求道者
は、この聖教でなくては救済の手はとどかぬ。

いやしくもこの歎異鈔を拜読する人ならば如何にも極端
に悪人の救済ということを主張してあることに、気のつか
ぬ人は一人もあるまい。しかし真実この悪人の救済とい
うことが、他人のことでなく自分のことであると、内心に感
ずることは、すこぶるむつかしいのである。そもそもかく
極端に悪人の救済ということ云わねばならぬわけは、自
分が極端なる悪人であるということ、自覚したからであ
る。自分が悪人であるということ、自覚もせぬのに悪人の
救済などは、すくなくとも自分には不必要のことである。
言葉をかえて云えば、この歎異鈔が、真実自分の生命にな
り、光明になりて下さるには、先ず極端なる罪惡觀にお
いつたものでなければならぬ、ということである。なるほ
どこの聖教には悪人の救済ということが極端に書いてある

この如く万尋の断崖にのぞんでいる吾人に対して、この歎
異鈔は、極端なる救済のちからをあらわして下さるのであ
る。

また歎異鈔が、他人のために危険である、人に道徳を破
つてもよいと勧めるかの如く心配する人もあるが、それは
無用の心配である。そも／＼宗教は、自分自身のことであ
つて、自分に対して救済が下るや否や、ということこそ真
の問題であれ、人のためにどうである、こうであるなどと
云つて居るのは、いらざる無駄言である。かくの如きことを
言う人の心持は必ずさういふことであろう。自分はさほどの
悪人でもないが、若し他の悪人がこれを見たり、または
これを見て悪を為したりしてはわるい、という心配であろ
う。よくよく自分の心を押えて見れば解るが、他人はとも
かく、我々はこのように極端の救済をいうてもらわねば、
自分自身の心が安まらぬのではないか。他人に対して道徳
上に有害、無害の詮索などをして居る余地のあるようなこ
とでは、いまだこの聖教の価値は解らぬのであろう。なお
もつと甚しく云えば、この如き人の心持は、自分は左程悪
人でない故に、この書物はいらぬが、他の悪人がこれを読
んだらば、もしや平気で悪いことをせまいかという、いら
ざる心配である。

なおもう一步進めて云えば、何人も極端なる罪惡觀のお

が、世人がその救済の説き方が極端であることにのみ着眼
して、その罪惡それ自身が極端であるが故に、救済がかく
の如く極端に云いあらわしてあるのである、と云うところ
に気がつかぬ。

もつと丁寧云えば、悪人の救済ということを極端に云
つてあるということは、先ず第一に、我々の罪惡が極端
に達しているということである。すでにかく極端に達して
あることに気がついて、到底自ら救うに由なく、絶体絶命
であるという場合に、仏はまた極端なる慈愛をもつて、極
端なる罪惡をすくいたもう、ということである。

世人がこの歎異鈔を拜読して誤解し易き点は、この極端
なる罪惡觀を起さずして、ただちに極端の救済を目につけ
るからである。はなはだ意地のわるい云い方なれども、こ
れをうがつて云えば、自分はさほどの悪人ではない、しか
るに仏は極悪の人間を救いたもうと聞いて見れば、まだま
だもつと悪をしてもよいと、いうような気持であるのであ
る。それゆえこの歎異鈔を読んで、悪はしてもよいのじや
なという誤解が出来るのである。真実自分自身で、罪惡深
重煩惱熾盛の者と自覚が出来たならば、そのうえに、悪を
してもよいのであるなどと云つておる餘地があるはずがな
い。どうしてなりともこの苦しみをのがれたい、どうして
なりとも、助けて貰いたいの考えより外はない筈である。

こらぬ人には、この聖教は無効である。極端なる罪惡觀の
おこらぬ人には、危険でありや否やというまでの効力はな
いのである。たとえて云わば、ここに火薬があつても、未
だ発火点に達するだけの温度がないならば、少しも危険で
はない如くで、極端なる罪惡觀の点火なきときは、この歎
異鈔は決して爆発をせぬのである。故に歎異鈔の中には、
実に偉大なる力はこもつて居るが、罪惡觀の火の無い人間
には、砂も土も同様である。故に本鈔を読んだために、人
は道徳を破る、などと云う危険は、毫もあるべきはずはな
い。もし本鈔を読んで、ここにこう書いてあるからと云う
て、平気で道徳を破る人があれば、それは歎異鈔で道徳を
破るのではなくして、本鈔が無くとも、充分道徳を破る者
である。むしろ道徳を破る口実に、本鈔を用いたというも
ので、實際上から云えば、歎異鈔の有無は、その人の道徳
を破るといふことに、何等の關係もないのである。

これを要するに歎異鈔の第一の特徴たる、極端に罪惡の
救済を説いてあるということは、詳細に云えば極端なる罪
惡觀に対しては、極端なる救済の光明が説いてあるとい
うことであるということである。即ち親鸞聖人が「極惡最下
の機のために、極善最上の法を説く」と云われたところで
ある。

さてこの極端なる罪惡觀に対して、極端なる救済の光明

を味わいたることは、實際実験の事実によりて、お話しなれば到底諸君のお心に、感じて頂くことは出来ぬことと考ふる。それ故に私は、私自身が極端なる罪惡観におちいりて、救済の至極を頂いた実験を述べ、また他の人が、極端の罪惡観におちいつた時に、私の経験を聞いて、同じく救済の至極を頂かれたお話をいたし、なおさかのぼつて、仏も我々同様の実験をへて初めて救済を感ぜられたる事実を述べ、結局親鸞聖人は、古今東西、この動かすべからざる仏陀の大なる力を、自ら実験して、これをこの歎異鈔の上に表示されたることを、お話ししようと思う。それ故先ずそろそろ私自身の懺悔からはじめようと思ひます。

未完



我心は僞物、仏の心は実物

一蓮院秀存師語録

みずからわれ、われに懺悔して云く。

秀存は、かつて一念の時往生治定というところに疑いあり。その一念に眞實（しんがん）あるべし。予が信の一念もしや實物（にせもの）にてはなきや、さらば往生不定なり、と案じたりき。

それより寢食安からず、日夜苦しめり。

今にして思うに、一念の信心というは、我心を真（まこと）にして落ち着くにあらず、この機は間にあわぬもの、願力のおたすけぞと、初めて知られた一念なれば、よき心を握りて落ち着くにあらず、何となれば、この方の眞実心は虚仮雜毒のものなればなり。

何時とり出して見ても、我心は實物なり。うそがうそと知られた一念が、弥陀の利他眞実にたすけられた眞実の一念なり。

たのまずよ よきもあしきも我心 とても他方にまかす身なれば

たれも知れ おのがこころのすてどころ、たすけたまへの外はあらじな

盆踊りの感想

数年前の旧暦七月十五日の夜であつた。近所で盆踊りがあるというので、妻や娘に誘われて見に行つた。場所は一寸小広い空地に櫓（やぐら）を組んで、下の段は踊り場であり、上の段は太鼓の場である。もはや沢山の人が集まつている。老若男女あらゆる人々が集まつている。

月は空に昇っている。櫓の踊り場には十人ばかりが踊っている。櫓のまわりの地面には、何十人ともわからぬ人が踊りながら櫓のまわりをまわつている。浴衣を着た男、浴衣に赤いしごきの帯をしてうしろで帯の端をさげて居る小さい女の子、白地の浴衣の青年や娘たち、それから弥次喜多のつもりか六十位のお婆さんが縞の半てんを着て帯には瓢たんをはさんでいる。喜多の方は年増の女の人でこれも半てん姿。三つの子供がお母さんに両手をとられて踊らせられながらまわつているのもある。

「月が出た出た、月が出た。三池炭坑の上に出た」という勇ましい炭坑節が始まる。みんな一せいに踊る。踊りな

福島政雄

がらまわつて行く。太鼓の音が威勢よくひびいて来る。みんなの気分が太鼓と一つになり、踊りの唄と一つになつて何十人のこころが一つに融けているように見える。

此の光景を目の前にして私の心には瞬間的に深い感じが起つた。仏のお浄土ではこんな風の一つに融けた気分が漲つていのではないだろうか。人間の日常生活はお互いに愛したり、憎んだり、嫉（ねた）んだり、恨んだり、嬉しがつたり、苦しんだり、悩んだり、羨（うらや）んだりしているが、その千万人の心が一つに融ける世界が必ずある。それは仏のお浄土である。

こんな心持が瞬間的に湧いて来て何だか涙が出そうになつた。併し櫓の上に眼を転じて見る。踊りはいよいよ盛んになつていける。五十恰好の男の人が大きな柄の白地の浴衣を着て上手に踊っている。それと一緒に七八人の男の人が踊っている。手がしなやかに動いて姿が様々にかわる。その姿を目で追うて行く。けれども踊りの心得などのない私にはうまく追うて行くことが出来ない。手と足とがどんな

に動いて変つて行くものか見さだめることが出来ない。ただ目まぐるしい心持で見ている。併しその私にもこの踊りの全場面の面白さは心に染み込んで来た。弥次喜多の二人の婦人が揃つて踊り、それに男の人も加わつて踊つた時、私には珍らしいという感じがあつた。

東京音頭、やつこさん踊り、何から何と踊りは次から次へと転じて行つた。少しうしろにしぎつて櫓の全体が見えるところに立つと、上の段の太鼓を打つ姿がはつきりと見える。太鼓は二つで太鼓の打ち手は一所懸命である。「どんどん、どどん、どんどん、どどん」その音は近くで聞いてもやかましくなくて、しかも遠くまでひびく音である。そして踊る人の心を、手を、足を、からだを支配する音である。踊らぬ私も太鼓に支配されるようである。

おもえば今日の盆踊りは日本國中、津々浦々に至るまで催される踊りである。唄と調子は所によつてかわつても踊る人の心は皆ひとつである。

孟蘭盆（うらぼんえ）といえは精霊祭（しよりうりようまつり）の時である。遠い先祖から近くはめいめいの祖父母や父母の精霊祭をするのである。十三日に迎え火を焚いて十六日に送り火を焚くところもある。世を去つた親しい人々をおもい、お墓参りをしたり、御仏前に香華やお供えのお菓子や団子をあげて読経をする時である。この孟蘭盆

お母さんも救われて物をたべることが出来るようになる、と教え給うた。これを聞いて目連尊者は非常によろこんだ。七月十五日が来るのを待つて釈尊が言われたように百味の飲食を供えて七世の父母を祭つた。此の日に餓鬼道の母親は久し振りに始めて飲み食いが出来た。そして餓鬼道から救い出された。

三

それは遠い昔の伝説である。併し孟蘭盆会の起りはこの伝説にあると言われている。伝説には真実がこもつていものである。私もこの伝説は何を意味するのかと数年間考へてゐる。目連尊者というのは釈尊のお弟子の中でも最もすぐれたお弟子の一人である。よく舍利弗尊者とならばられ、舍利弗は智慧第一で目連は神通（じんずう）第一であると言われている。神通力というのは六神通と云つて、天眼通、天耳通、他心通、宿命（しゆくみよう）通、神足（じんそく）通、漏尽（ろじん）通の六つである。この神通力は無我の境に入つた人に現れ来るものとともう。目連尊者は無我の境に入つて母の姿を見た時、餓鬼道に入つてゐるのは母の罪ゆえではなく、目連自身の食欲の罪ゆえであると感じ自分の力では何ともならぬということがわかつたのである。それは目連に開けてゐる智慧によつてわかつたのである。それで釈尊からお前の母は罪が深いと云われてい

の時に、一方ではこんな賑やかな盆踊りをするその心持を私は静かに考えるようになった。

二

むかしむかし印度の伝説である。

釈尊のお弟子の中でも神通第一と言われていた目連尊者が、世を去つた母の行方をたずね求めて遂にたずね出したが、悲しやお母さんは餓鬼道におち込んでゐる。

地獄、餓鬼、畜生を仏教では三悪道という。その餓鬼道というのは食欲の衆生が落ちいるところである。そうして食欲の報いの苦しみを受ける。腹は大きくていつも空腹であるのに、喉は針のように細くて食物も通らぬほどであるのみならず折角食物を手に入れても、これを食うことが出来ない。食物は口まで届かないうちに火になつてしまふ。

目連尊者が悲しんでたべものを餓鬼道のお母さんに供える。お母さんがよろこんでそれをたべようとすると火になつてしまふ。尊者は立つても居てもたまらぬほどに悲しくなつた。そこで釈尊のところへ行つてどうしたら母を助けることが出来ましようかとお尋ねするのである。

釈尊は安居（あんご、四月十六日より七月十五日までの修行期間）の終りの日、すなわち七月十五日に百味の飲食（おんじき）を供えて七世の父母を祭るがよい。そうすれば衆僧の修行の力がそこに集められて、そのお蔭でお前の

よいよ智慧の光の下に自分の罪の深さを感じる。

七世の父母を祭る心は自分が衆僧の修行の力に助けられて絶大の慈悲のまん中にとりつまつまれていることに目ざめる心である。無量寿、無量光は自分一人のためであるということに目ざめる心である。餓鬼道にある母の姿を示されて始めて自分の無量劫の煩惱悪業に気がつく。表から見ても裏から見ても、自分には親孝行などということが微塵もない。七世の父母を祭つても自分のこの姿がしみじみとわかつて来る時、目連尊者の目の前にあつた餓鬼道の母のすがたは消え失せる。

七世の父母は無量寿、無量光のまことを此の身に感ずる尊い縁である。そこに南無阿弥陀仏の称名がある。称名の前に餓鬼道の母のすがたが消え失せるばかりでなく、子供の死を悲しむ人の愚痴の思いも和らげられて行く。七世の父母を祭る孟蘭盆会は私どもの心を暗い悲しみの世界から明るい歓喜の光へと導いて行く。清浄、歡喜、智慧の光あまねく此の世を照らして、仏のお浄土の光に此の世の私が触れて行く。そこに孟蘭盆会の意味がある。

盆踊りは目連尊者のお母さんの姿が餓鬼道から消え失せた時の尊者の歡喜を象徴する。こんなことを考える私に盆踊りの太鼓の音は三晩つづけてきこえて来た。

月は美しく天心に澄んでいた。

人間が月に行くまでに科学が進んだ今日、人間疎外とか人間不在ということがよくいわれる。人間の影が段々うすくなるということである。科学は何ごとでも廻り道はせず余計な無駄をせず、合理的にテキパキと処理しているようにする。そこでは人間の喜怒哀楽の感情は無視せられ、人間の影がうすれていき、人間疎外とか不在が叫ばれる。

ところで、人間の本来の特徴は、一人一人が名前を持つていることである。何の何がしという固有名詞を持つところ、人間としての存在と価値がでてくるのだと、哲学者で仏教者である西谷啓治博士は説かれる。一人一人の人間が名前を持っているということは、一人一人の人間がかげがえのない存在であるということである。更に博士はいう、故郷というものは、そこに存在するすべてのものが固有名詞を持つものとして、自分に関係してくる世界である。人間ばかりでなく山も川も橋も固有名詞を持つたものとして自分に対し触れてくる。故郷が深い安らぎを与える

としてはとてもない科学の海の一波にすぎない。とにかくこの会場で私は私の名を呼ばれたのである。名を呼ばれてハッとしてかえつた。私は私の人間的存在にかえつたわけである。とまどう私に「棚瀬ですよ」といわれる。十尺ほど先の人混みの中に、欧州を廻つてこられたサンノゼの棚瀬氏が、カメラを片手に微笑して立つていられた。「ヤーお元気でー」と堅い握手をかわしたことがあるが、思いがけぬことでありそれだけに懐しいことであつた。

「旅人とわが名よばれん初時雨」は芭蕉の句である。旅のわびしさに徹した芭蕉にしても、晩秋の時雨にあつてはわが名を呼んで欲しいほどに、人恋しかつたのであろう。思えば私は長い／＼間、無明の迷いの旅を続けてきた。その長い間体むことなく如来様は私の名を呼び続けて下さつたのである。呼ぶ声は、そのまま自らを名告る声である。「今現在説法」と現在唯今も私をお呼び下さつているのだ。

二

お互いに名を知りあうということが、人間相互の上に深い意味を持つているようである。相手の名の呼び方にも交遊程度の浅深がうかがえる。「名を重んじる」ことが、正しい生き方だと日本では教え伝えられてきた。米国では自分の名のサインが一番大切なことで、サイン一つで結婚も

か、懐しいところだというのはそういうことである。

更に人間は肉体の故郷をこえて心の故郷を求めていく。ここに宗教の世界が開かれるのだと西谷博士はいわれる。

混んだ電車の中で沢山の人間が押しあつていながら、お互いに人間存在的な注意はちつともしていない。ところが混みあつた電車の中で誰かが「おい何々君」と声をかけた時、そこに人間本来の世界があらわれてくる。また呼ばれた方が誰が呼んだのだろうかと、不審顔をしていると、

「何々だよ」に自分の名をなのる。呼ぶことはそのまま名のことである。以上の博士のお説を読んで、私は一つ一つうなづくのだ博士のお説はもつともつと詳細で泉の流れるように自然でこんこんとして尽きるところがなく、何人も納得せずにはいられぬ底のものである。

今度の訪日の旅程の中の万博見物の一日、私はこのことを実感した。一日五十万人も入場する人混み、それは寄せてはかえす人の波である。一九七〇年代を象徴するという万博では、この大きな人間の波さえも、茫洋(ぼうよう)

離婚も成立し、財産の譲渡や、貸借も成立する。サインには個性がある。どんな下手なサインでも他人では真似のできぬ特徴がある。これはサインだけではない、物のいい方歩き方、考え方も、その人その人のもので、他人では真似のできぬ特徴がある。自分は何の特徴もない平凡人だと思つていても、平凡は平凡なりに、私は飽(く)まで私である。この自覚から人間の正しい生き方が始まるのだ。

私は飽くまで私であり、絶対に私以外のものではない。ところでその私というものは一体どういうものであるのか。よく考えれば、外側はいかにも賢く強く立派そうに見せかけているが、その実内側は孤独の淋しがりやで無力で、その上強がり欲ばりで、また愚か者である。親鸞聖人が「賢者の信は内は賢にして外は愚なり、愚禿が心は内は愚にして外は賢なり」と愚禿抄の上下二巻の真最初に「自身を表白されている。一口にいえば本当は愚か者のくせに、外側賢くぶつた振りをしているのが自分だと仰せられている。

私達は夫々何の何がしという固有名詞の姓名を持つており個性があり特徴があり、その故に人間存在として意義と価値があるのであるが、その正しい自覚というか、もう一つ深いところを掘りおこし反省せしめられなければ、真実の人間存在としての意義と価値がでてこないのだ。なぜな

れば「外は實にして内は愚」だからである。賢こぶつた強がりの外殻で真実なるものをさえぎり、呼び声をはね返しているのが、本当の私ではないだろうか。その頭迷固牢の私に対するお呼び声が、如来様の名のりのお名号である。

阿弥陀経は釈尊の無問自説経だといわれている。大概のお経は、誰かの問いか願いに応じて説かれているが、阿弥陀経は、釈尊がご自身の出世本懐が、念仏のいわれを説くためであることを、舍利弗を相手に説かれたもので、釈尊一代経のしめくりの結経だともいわれている。この短いお経の中で、舍利弗よ、舍利弗よ、と、舍利弗の名が三十六回くり返して呼ばれている。

聞きわけのない頑是ない子供に、母親がかんでふくめるように、「デョージよくお聞き、デョージそうじやないか」と口を酸つばくしてくりかえす慈悲の深さが、舍利弗を三十六回も呼びかけたもう釈尊のお説法のうちに感じられるのだ。舍利弗は私を代表して下さっており、阿弥陀経をはじめすべての法門は私一人のためのお呼び声である。

三

おやさまのみ名、南無阿弥陀仏のお呼び声を聞き開く時その慈悲がわが心にしみとおつて信心となる。よつてその信心は自分の力で造りあげた自力建立のものではなく、如来様から頂いた他力廻向の信心とよばれるのである。

ことを静かに反省してみたい。この二つの名は全く天と地のようにかけ離れ、真実と虚偽との相対する異質のもののようにみえる。ではこの二つは永久に平行して交わる時がないのであろうか。もしそうだとすれば、そうした真実は相対的なもので、真実の如来様ではない。

この如来様は、虚偽なるものを何処までも捨てたまわずして、やがて真実にとかしこんでしまわずにはおかれないう方である。相対の心しかない私共にとつては、不可思議の大誓願と讃仰申すほかはない。たとえば親と子のように、二つであつて一つ、一つであつて二つ。親は子になりきりながら子を超える、如来様は私共を一子の如く憐愍され、如来が衆生化して下さることによつて、私共衆生が如来化され、念仏成仏のめぐみをうける。ここに私共の力では地獄一定の身も、如来様の絶対な不可思議力によつて、不可能が可能化される、これを横超（おうちよう）の直道（ちきどう）と讃えられている。

このあるべからざる私共凡夫成仏の道が成就するには、如来様の呼び声、大悲招喚（だいひしようかん）のお呼び声を聞く一つにひらける。善導大師は二河白道の譬の中でこのお呼び声を、西岸上に人有つて喚うて曰く、

「汝一心正念にして直ちに來れ、」
と示して下さつた。進むことも、退くことも、とどまることも出来ぬ、絶体絶命の私共を、かねてしろしめしての

私達の名は夫々の人間存在的意義として、まことに意味深いものであるが、名と内容が不相応の場合が多い。即ち私の内容が名にふさわしくなく、お粗末至極なものであるたとえば私の名は恵実と父につけて貰つた。いうのもお恥ずかしいほどに思うのだが、この名の由来を私が子供の時、父が一度だけ説明してくれたことがある。それは大經に釈尊の出世本懐を説かれた一段に「恵以真実之利」のおことばがある。釈尊がお生れになつたのは、人々にまことの幸福を与えるため、即ちお念仏の教を説くために、この世に出て來られたというお言葉である。この中から恵と実を頂いたのでというふうな父の話であつた。文面から云えば大変立派な名である。だが私自身の内容というか、これまで歩んできた道や、現在毎日やつていることを考えてみると身の置きどころもない恥ずかしさを覚える。名にそわないというよりは、名の真反対の自分自身がみえるからである。これは名と内容とが不一（ふいっち）である。

如来様ののみ名、南無阿弥陀仏のお功德をのべて、名体不二（みようたいふに）と云い、全徳施名（ぜんとくせみよし）という。南無阿弥陀仏はお名前とその実体が全く相応し、また僅か六字の中に総ての万善功德が盛られている。

おまことと、お慈悲ばかりで練られ盛られた、六字のお名号を仰ぎみる一方、自分自身の名前と実体との相違する

大悲のお呼び声である。池山栄吉先生は、この善導大師の聖語を、「オネガヒダカラ、スグキテオクレヨ」と迷い子の帰りをひたすらに待つ母の悲心になぞらえて、かんでふくめるように、深くお味わいになり、人々にもお勧めになつた。池山先生のこの一句を刻んだ碑は、京都西山の有名な吾寺に近い浄住寺の境内に建ち、八年前私もここにお参りした。かくて如来様のお慈悲は、称え易く持（もた）ち易いお名号となつて、「われをたのめ、われをたよれ、わが名を唱えよ」と、私に呼びかけて下さる。御和讃に

如来の作願をたすぬれば

苦惱の有情（うじよう）をすてずして

廻向を首（しゆ）としたまいて

大悲心をば成就せり

と、このことを讃仰下さつている。

よきひとの仰せにききて御名をよべば

喚ばわせたまうみ声きこえぬ

と池山先生はその信味を述べられている。迷い児が空しく親をよぶ声でなくして、呼びつこたえつ、こたえつ呼びつ、一つ呼び名に親と子が一味にとろけたたのもしさの念仏である。

念 仏 詩 抄 (四)

木 村 無 相

無 心
無心——

草が

石が

雲が

雀が

わたしは——

どこへ

どこへ

ねんぶつなしに

どこへ——

ねんぶつ

によらいさんが

わたしをおもって

おもって おもって

おもって

によらいさんが

おもって おもって

くださるのが

ねんぶつ

によらいさんの

おもいがわたしに

とおって とおって

それが ねんぶつ

ねんぶつ

ねんぶつ

ねんぶつ

ねんぶつ

無 常

無常というは

うつくしい——

し あ わ せ

ひとすじの道に 出たものは

しあわせ

ひとすじの道を 生きるものは

しあわせ

ひとすじの道で 死ぬるものは

しあわせ

道

道がわからなくなったとき

ただねんぶつより

ほかない わたし

ねんぶつのみが道をひらく

ああそれよりも

ねんぶつが 道——

不 可 思 議 よ

死の国への

ふかき闇路を

無常というは

ありがたい——

乳 の ん で

わたしは きょうで 六十七

この世じや まだまだ 赤ン坊

ナムアマミダブツの

乳のんで

再 出 発

一九七一年

二月二十日

きょうは わたしの

誕生日

きょうから わたしは

再出発

ナムアマミダブツと

再出発

ナムアマミダブツ

ナムアマミダ

みひかりの
国へ生まるる
ひかり満つ道と
したまう
不可思議よ
ああ
不可思議よ
ナムアミダブツ

ああ幸(さち)

雲みれば
雲のよびかく
水みれば
水のよびかく
ものみなに
よびかけられつ
ものみなと
したしみ生くる
ああ
幸(さち)
幸(さち)

歎異抄とところどころ(三)

花田正夫

八 ただ念仏して

歎異抄の二条に

「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしとよきひとの仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり。念仏は浄土にうまるるたねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべらん、総じてもて存知せざるなり。たとい法然上人にすかされまいらせて念仏して地獄におちたりともさらに後悔すべからず候。その故は自餘の行をばけみて仏になるべかりける身が念仏を申して地獄にもおちて候わばこそ、すかされたてまつりて、という後悔も候わぬ。いずれの行もおよび難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」とあり、その末尾に

「詮ずるところ愚身の信心におきてはかくの如し。このうえは念仏をとりて信じたてまつらんと、またすてんとも面々のおんはからいなりと、云々」と結ばれている。はるばる関東から身の危険をもちえりみ

ご信心(一)

わたしの信心
雪だるま
オテントさま出りや
すぐとける
オテントさまが
ご信心

ご信心(二)

ご信心とは
弥陀の智慧
わたしが信ずる
それでない
大信心は仏性なり
仏性すなわち如来なり
如来の智慧をたまわりて
智慧の念仏 ナムアミダブツ

ナムアミダブツ
ナムアミダ

ないで京都の老聖人をたすねて来た同朋達、文字通りの一期一会、この世の再会を期し難い人達への聖人が信の底を叩いて語られた金句である。
このことは口伝抄に、如信上人の言葉をうけて覚如上人が誌されている、恐らくは、如信上人も唯円房と同座していられたのであろう。又、恵信尼(えしんに) 公文書にも、同じことがあるところから、このことは御家庭内でも聖人が常に語られたと思われる。

さて、前にのべたように、念仏は仏様へのお挨拶とか、死んだ時に申すものという位にしか思っていないかつた無仏の状態の私に、この聖人のギリギリの仰せは、大切とは思ふものの何度も繰り返して読むばかりで、何時も振りおとされるばかりであつた。

しかし、恩師、池山先生は、色々の演題で信仰感語をくりかえして下さる時、何時もこの仰せを引用されて、「親鸞におきては」を「池山におきては」と読みかえ、

「よき人」とあるのを「親鸞聖人」と仰いで、内にも外にも光を失つて、明日への希望の灯も消えた四十二歳の時「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらずべし」の一句がひらめいてきて、地獄一定の聖人もそうされたのか、じや池山も！と心に決するなりに、お念仏が湧き出るようになるつた」

と御自身の体験を語られて、君方もこの道一つをたどるように、と勧められた。

しかし、私には仰言することはハツきりしているのに、どうもそこが身にそわない日が永年続いた。念仏はともかくも申せるけれど、たのもしさの伴わない、迷い児が母を求めて空しく叫ぶという具合であつた。

「他力の願行を久しく身にたまちながらよしなき自力の執心にほだされて、このたびむなしくはてなんこそ、かえすがえすも口惜しけれ」

とある誠めは身がいたむ程ひびいて来るが、病原が何であるかも解らないで苦しむ病人に似て、始末におえぬことであつた。

近角常観師は「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらずとは、お慈悲のお念仏ばかりでたすけられるということである」と仰言る。又「重病入へのお粥の念仏である」と明遍僧都の体験を引用され「私共のために選びに択ばれた本

めるのである。

世間一般の信者にはこうしたものが多い。そして順境な時はおかげとよるこぶが、逆境が続きどうにもならなくなると「苦しい時の神だのみ」も息が続かず、はては神も仏もあるものかと転落する、そしてそれが必ず万人のまぬがれない死の深淵に立たされた時、魔法がきかなくなつた魔術師のような幻滅が待ちうけている。

ここに対応の宗教について二つの大きな誤りが知れる。

一つは、自分の願いを肯定し、それを当然として追求していること、二つには超人的力を持つ神仏は、この自分の願いをかなえて下さるものとひとりぎめしている点である。言いかえると、自分の願望を満足さすために、自分に都合のよい神仏を想像してそれをたのんでいるのである。

ツルゲネフの詩に、地上に蚤がふえてこまりきつた人が女神をたずねると、大きな机によりかかつて女神はしきりに考えごとをしている。恐る恐る進み出た人がそのことを訴え、蚤をすくなくして貰うように願ひ出ると、女神は、人間があまりに横暴を極めて蚤をいじめすぎるので、蚤の足をもつと強くして、早く逃げるようにしようと思心している最中です、と剣もほろろに追いかえされたとある。また、粉屋は、自分のために小麦が成長していると考えているなどと、自我中心、人間横暴への反省をうながしている。

願の念仏である」と懇切に手を引いて下さる。

教行信証の信巻に「彼の無碍光如来の名号は、能(よ)く衆生一切の無明を破し、能く衆生一切の志願を満てたも。然るに称名憶念(おくねん)すること有れども、無明なお存して所願を満てざるは如何とならば……いわく如来は是れ実相身(じつそうしん)なり、これ為物身(いもつしん)なりと知らざればなり」とある。私自身、この為物身としての如来を知つていないことが問題であつた。私のための如来でましますのに、この私の正体があきらかでない、そこにもや／＼が何時もあつた。

九 如来の廻向

小山法城師が、福岡での寺族講習会で、真宗の特長は逆対応(ぎやくたいおう)の宗教である、多くの宗教は対応の宗教である、これをよく知つてほしいと云われた。

思うに、私共が宗教を求めるのは次の順序による。はじめて人や物を力にしているが、やがてそれらも真のよるべくないと知り、今度は自分以外にたのみなしとなる。しかしその自分の能力や判断も不確かで、このいのちもはかないと氣ついて、よるべのない身のよるべを求めて、超人的な力の持主の神仏に祈願する。そこに自分の願いが中心になつて、その願いを自分で満足さすことは出来ぬが超人的な神仏はこの願いをかなえて下さるだろうときめて祈願をこ

我々が願うものも所詮は身びいきな願いから出られないとすれば、そうした願いそのものの間違いを知らねばならず、又身勝手な、自分だけに都合のよい神仏はあり得ないと知らされる。古歌にも

こころのみまことの道にかないなば

祈らずとも 神やまもらん

とある。自身をただすことが一番大切な問題である。これが出発点であるが、何とその道の至難なことか。永遠のまこととは何か、それを見出す力があるか、更にその実行が出来るのか、ということになると、古来無数の人々がその道を求めて中途で没落の憂き目にあえいでいる。

「至誠もつて動かざる無し」という儒者の教えに心うたれて、その実行にかかつた吉田松蔭も、時の幕府の政策と違反し、野中の獄に投ぜられ、彼に近づく者も亦投獄される始末で、遂に孤立無援の身となつた時、「我に誠足らざるなり」と、我身の駄目さに絶望して絶食致死をはかるに及んだ。幸に母のまこと心にふれて、「順の一字」を知らなかつた、と慚愧して、母の切なる願ひに順ずるようになって所刑の日まで大切に生きることが出来た。

さて、逆対応の宗教、とは、自分の見た自分ではなしに、仏の目にうつる私が、仏力ひとつの働きで、成仏せしめられることである。私共は極く素朴に考えて、私の事は、わ

かりきつたこととしているが、ソクラテスの提唱した「汝自身を知れ！」の神言は、足下をきびしく省みさせられる鏡である。後の世にデカルトが出て、「我すべてを疑う」というところから出発して、遂に疑うことの出来ぬ事実として「我思う故に我あり」と言っている。そして疑うのは智慧がない不完全な身である、不完全な身と知れる奥には完全なる神がまします、というような明るい世界に浮んできている。筋道は単純であるが、これを身につけることはまた至難である。というのは私共にはうぬぼれの心がどつかりとひかえていて自分で自分の不完全を肯定することは死よりもつらいことになる。俗に盗人に「三分の理あり」と云うが、何処かに言いわけせずには居られない、全自我の否定などは不可能である。

釈尊は「鏡は鏡自身をうつし得ず、刀は刀自身を切るこゝとが出来ぬように、如何なる智者と雖も身辺三尺は暗闇である」といわれる。してみれば自分を知る道は、曇りのない、でこぼこのない、よく磨かれた鏡にうつす外に道はない。さてその鏡は人それぞれに選ぶのであるが、再び難事は、それを選ぶ力のない自分ということである。今まで手あたり次第に、あれか、これかと選んできたが、何時も自分の駄目さに突きあたつて碎けてしまった。こうして出口のない迷路のさまよいを徒らに続けている

私共の気づき得ない遠い前からの呼びかけであつた。

歎異抄の第十六章に

「日ごろ本願・他力・真宗を知らざる人、弥陀の智慧をたまわりて、日ごろの心にては往生かなうべからずと思いて、本の心をひきかえて本願をたのみまいらするをこそ廻心とは申し候え云々」

とあるが、弥陀仏の智慧から出た教えの鏡に照らされて身は煩惱具足の穢身であり、世は火宅無常の世界として、よろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきを知らされ、それをしるしめして飽くまでも呆れたまわず、見捨てたまわぬ絶対のまことにふれて、私の願い、煩惱を地盤とした身勝手な願いの満足ではなく、すつかり駄目な私の上に、仏の本願が働いて下さつて「泥中に開く蓮華」のように、信心の花を恵まれたのである。

昔ガリレオが出て、地球はまると発表し、またコペルニクスが生れて、天動説から地動説に大転換した。地上に住むわれわれの眼には、地球は平たく、太陽は地球上を廻つているとしかうつらない。しかしその考えに固執する限り天体の運行の謎は解けないばかりか、四時の運行もわからなくなる。こうした地球中心の考えは破られて、太陽中心の運行があきらかになつた。

これらは科学上の問題であるが、宗教上にこの転換が体

時不思議な声が聞えた。響えて見れば、私共が伊勢の山田駅につくと、沢山の宿引きの番頭さんから声をかけられる、やがて外宮や内宮に近づくと土産物屋の売り子さんから呼びとめられる。しかし、一文無しの旅人であれば、どんな呼び声も聞き流す外はない。唯一人、誰も呼びかける人もない身に、フト声がある。「サアおいで、貴方の文無しも、汗まみれで空腹なこともよく知つている、その貴方を迎える宿がある、その貴方に渡す土産がある、」と。

私はこの声をきいたのである。それは親鸞聖人からであつた。教行信証の一番大切な信巻の至心釈（しんしやく）に「仏意はかりがたし、然りと雖もひそかにこの心を推するに、一切の群生海、無始よりこのかた、乃至今日今時に至るまで穢悪汗染（えあくわぜん）にして清浄の心無く、虚仮偽（てんぎ）にして真実の心無し。ここを以て、如来一切苦惱の衆生海を悲憫して不可思議兆載永劫において菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修、一念一刹那も清浄ならざるなく、真心ならざる無し。……如来の至心をもつて諸有の一切煩惱・悪業・邪智の群生海に回施したまえり云々」

私共の遠い昔から罪惡深重、煩惱熾盛の身をかねてしるしめされてその手のつけようのない身に呼びかけられる声を知らされたのである。しかもそれは昨日、今日からのことでない。

験されるのを廻心（えしん）と呼ばれる。如来の本願に帰して、自我中心の一切の言動がそらごとたわごとまことあることなしと知らされる時である。歎異抄二章に

「念仏はまことに浄土に生るるたねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべらん、総してもて存知せざるなり。たとい法然上人にすかされまいらせて念仏して地獄におちたりともさらに後悔すべからず候。その故は自餘（念仏以外）の行を励みて仏になるべかりける身が念仏を申して地獄におちて候わばこそ、すかされたてまつりてという後悔も候わめ、いづれの行も及び難き身なればとても地獄は一定すみかぞかし」

とは、よき人、法然聖人をおして、選択本願の念仏の智慧を頂かれた親鸞聖人が、御自身の智目（ちもく）なく行足（ぎょうそく）を欠く身を照らし出されての表白である。そしてそれは生命がけて聖人をおたずねした関東の同行方の姿であると共に、これを読む私自身の姿である。



聚墨生

○ 仏誕生の日、七歩あゆんで天と地を指し「天上天下、唯我独尊」と告げられた

(仏所行讃)

これは釈尊が地獄、餓鬼、畜生などの六つの迷いの世界を超え、大智かがやき、大悲うるおう境界を願われたことの象徴である。やがて二十九歳出家、苦行六年の三十五歳のとき、大願が成就された。かくて仏陀は一切の衆生を觀察されて、

「奇なるかな、一切衆生は皆これ一大蓮華池なり。或はつぼみかたく水中に、或は色つきふくらみ、或はすでに見事に開花している」

と驚歎された。絶対の仏智の眼が開けると、われ賢しと誇るのではなく、一切の人々の上に尊いものが見出される。人々は宝を持ちながら空しく迷っているのを仏は憐れまれて赤色に赤光、白色に白光、黄色に黄光と夫々に心の花を開かせようとの悲願一つに生涯を貫ぬかれたのである。

の道が私共の上におのずから開かれてくる。

○ 四六年六月一日。

拳身(こしん)の光中に、五道の衆生の一切の色相、みなその中において現ず。

(観経・観音観)

お手伝いさんが過つて大切な花瓶をわつた時、主人が、「ケガはなかつたか。人には誰しもあやまちはあるものじや。物はわれても亦買うことが出来るから」と、思いやりのある優しい声をかけられたらどうであろうか。

「わたくしがそこで申しわけがありません」と素直に自分の過失をわびるであろうが、若し「お前は大変なことをしてくれた。どこでもたやすく買える花瓶じゃないの……」と責められるだけであれば、「誰だつてあやまちはあるもんじや」と、内心で強く反抗するであろう。

昔から「慈悲に刃向こうやいばなし」と云うが、観音の慈悲の権化(ごんげ)にまします親鸞聖人の、ご理解ある心にふれてわれらが罪業の身も、そのすべてをみ仏の前ささげる。

この限らない慈光を身にうけないと、自分の愚悪さも、

私共もこの仏陀の慈育をこうむつて信心の暁を迎えるとき、仏陀の誕生を私共の真の心の誕生として祝福せずにはいられないのである。

○ 四六年 五月十六日。

過去・未来・現在の仏は、仏と仏と相念じたまえり

(大無量寿経)

親鸞聖人は恩師法然上人の上に仏の智慧の光を仰がれ、和国の教主、聖徳太子の上に仏の慈悲の光を拝されて、その護持と養育を年と共に深くよろこばれている。

また同じ念仏の道を求める人々の身に、仏の善巧のはたらきを見出されては、御同朋御同行とかしずかれています。

かくて、聖人は老少善悪の人をへだてず、いかなる愚人悪人もかならずたすけとげられる大道ここにありと、身をもつてあかしつづけて下さつた。

この聖人の御信徳に私共は仏の智慧と慈悲の徳光を拜して、浄土化現の善知識とよろこび渴仰せずには居られない。こうして人格の無上完成と申すより言いようのない成仏

素直に認めて懺悔することは出来ない。あだかも寒風にあえば、人々は外套にしがみつくが、陽光に温められると、外套を脱いで正体を自然にあらわすように。

○ 四六年七月十一日

真理の一言は悪業を転じて善業と成す。

教行信証

三人の子までありながら風波のたえぬ家庭があつた。ついに愛想をつかした妻君が、もう今度こそは別れようと末娘を連れて実家に帰つた。色々な人が仲に入つたが、双方ともに頑強にことわり、施すすべもない始末であつた。

ところが、母親の居ない家で笑いを忘れて元氣のない幼い二人の男の児をなぐさめようと、父親が海水浴に連れ出し、旅館で夕食が出た時、兄がシャツの上から胸を叩くと、弟も同じ所作をしてニコリ笑つた。父親が怪しんで調べると、汗で色あせた母親の写真を夫々に持つていた。

これを見つけた父親の心は一変した。大人の世界にこそよしあしを云い張るが、子供にとつては母は是非を超えてかけがえのない人で、一途にその帰りを待つてゐる。そのいじらしさにうたれて父親の心のしこりがとけ、これを知らされた妻君も、涙とともに子供のものと急いで帰つた

四六年 八月八日

あとがき

待望の秋が訪れました。一葉落ちて天下の秋を知る」と詩人は云い、黄ばんで落ちる桐葉の一片に天下の秋を感じた詠歎であるが、地上のいたるところに落ちてくる仏語、悲語を味わせて頂きました。

近角先生の「懺悔録」掲載は、御令息眞観様がよろこんでおゆるし下さいました。世は移り、人は変わりましたが、我々の目は二つ、口は一つでありますように、人心の機微は何時の時代でも、また地上の何処の民族にも通じて変わらないところがあります。先生のお言葉によって万人に通じる久遠の真実を共に仰がして頂きました。

福島先生はお盆の月の御感想をおとどけ下さいました。伝説には真実がこもる、と仰言っていられますが、真実は説話の形に於いてのみ私共が感得させて頂けることでもあります。逝く盆の月を思い浮べて味読させて頂きました。

呼び声は、北米サンノゼの北条師の還暦記念の出版書から転載しました。北米の開教に四十年近く尽力され、而も二世、三世の日系人の仏教について常に心を傾けていられる方です。

木村さんの念仏詩抄に、六十七回の誕

生日を二月に迎えられ「病身とて来年はわかりませんが、したいことはいつばい。しかし念仏詩抄一本にうちこみたい」とのことです。撰取不捨の光明下に、平生業成、臨終のいかんをまたず大安心の身にさせて頂くというたのもしさがなければ、人生はまつくらであります。このたのもしさのない時、死後は仏教、この世は自分でという変なものになり勝ちです。

一道会 御案内

時、十月二十四日午後一時。

所、京都市右京区山田開町浄住寺。

道筋、京都駅より苔寺行きバス、終点下車。新大阪、桂駅乗りかえ、上桂下車

車。新大阪、桂駅乗りかえ、上桂下車

今年は特に十月二十四日に決定いたしました。御参会下さい、お待ち申上げます。

本年は岡崎市の杉浦豊さんのお懇念で、池山先生の「信を行く旅人」が再版されるはこびになりました。ありがたいことです。

御案内

○ 毎月第一、二、三日曜、午後一時半。一道会例会

市電、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、左入ル。

○ 毎月二十四日、午前午後、昭和区小桜町、教西寺、法話会。

市電、御器所通り下車。市バス、北山下車。但し、十月二十四日は休みます。

定価 半年 四〇〇円 (送共) 一年 八〇〇円 (送共)

名古屋市南区駄上町二ノ八八 編集・発行人 花田正夫

電話八二一〇七〇三七番 愛知県西加茂郡三好町大字福谷 印刷人 吉野 穂志郎

名古屋市南区駄上町二ノ八八 発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番 郵便番号 四五七

慈光第二十三卷 第九号 昭和四十六年九月十五日発行 (毎月一回・十五日発行) 昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可